

# 郷土博物館・文学館だより

## 特別展

# 与謝野晶子と文芸誌

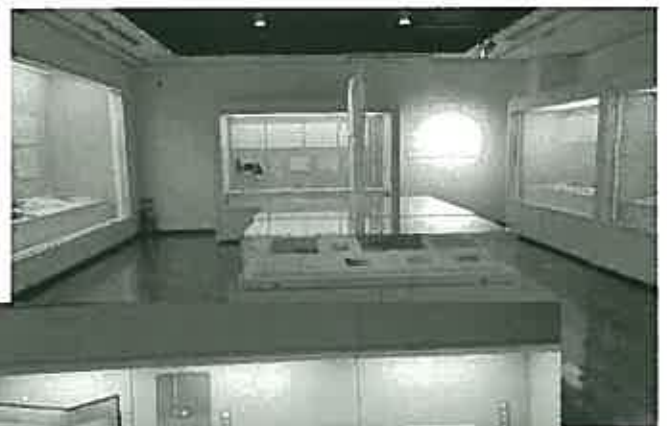
—「明星」から「冬柏」まで—

## 開催中

当館では特別展「与謝野晶子と文芸誌—「明星」から「冬柏」まで—」を、令和3年1月11日（月・祝）まで開催しています。

与謝野晶子（1878—1942）は明治34年（1901）に故郷の大阪・堺から上京し、約7年半を現在の渋谷で生活しています。晶子は渋谷にあった短歌結社・東京新詩社の機関誌「明星」上で数多くの詩歌を発表し、「明星」終刊ののちも、様々なジャンルの作品を文芸誌に掲載しました。展示では、晶子が関わった文芸誌のうち「明星」「スバル」「冬柏」を中心に、晶子の多岐に渡る文学活動を紹介しています。

展示室では上記の文芸誌や関連する歌集のほか、新詩社社友に送られた書簡や晶子自筆の歌幅など、初公開となる資料を紹介しています。また晶子の私物や与謝野鉄幹・晶子夫妻を描いた油彩画などを、晶子ゆかりの資料として展示しています。



展示室内



10月31日開催 展示解説の様子

## 原宿とファッション

現在の代々木公園と国立代々木競技場などの一帯は、戦後しばらくは「ワシントンハイツ」と呼ばれるアメリカ軍の施設でした。周辺には、米兵と家族向けのパーティー用品を売る店やハンバーガーショップ、米軍の払い下げ品を扱う店などがあつたといひます。「キティランド」も当初は書店でしたが、外人向けの雑貨や玩具を取り扱うようになりました。

昭和 39 年(1964)の東京オリンピックにあわせ、「ワシントンハイツ」が日本に返還され、「選手村」として使用されると、街には多くの外国人観光客が現れ、外国人向けの土産物屋なども作られました。そうした異国情緒や大会への関心からアメリカ文化を求める多くの若者が渋谷や原宿に集まつたといひます。

その中で裕福な家庭に育つた若者たちが集まり「原宿族」と呼ばれ、さらにそれをまねる若者がこれに続いて現れました。彼らはピザやコーラを片手に闊歩し、アメリカ文化を満喫しました。さらに、原宿ブランドのはしりである「マドマーゼル・ノンノ」(昭和 39)が開店し、「原宿トレンド」の元祖となりました。

竹下通りと明治通りの角地に「パレフランス」(昭和 48)ができると人も増え、住宅地の竹下通りに少しずつ店舗が増えました。さらにマンションメーカーといわれる小さなブランドが集まり、「ラフォーレ原宿」(昭和 53)でそれらを販売すると DC ブランドが誕生し、1980 年代の原宿ファッションの発信地となりました。

一方、昭和 50 年頃よりディスコブームが興り、新宿や六本木のディスコで踊つていた若者たちが派手な衣装で未成年だったため追放され、

原宿の竹下通りの「ブチック竹の子」を根拠地とし集まるようになりました。彼らは原宿の歩行者天国(ホコテン)で踊るようになり、「竹の子族」と呼ばれました。その服装は赤・黄・緑色などのサテンのハーレムパンツに鉢巻、サングラスにカンフージュズで、ディスコミュージックで踊りました。しかし多くの見物客が集まるため、代々木公園に移り活動し、そこでは「ローラー族」も脚光を浴びました。毎週日曜日には代々木公園に2千人もの若者が踊り、それを超える見物客が集まりました。



昭和 55 年踊る若者たち

昭和 54 年(1979)に明治通り沿いにオープンした「BEAMS」はセレクトショップのさきがけとなり、その後の裏原宿やキャットストリートと呼ばれる周辺地域の発展の元となりました。昭和 57 年には「原宿テント村」がオープンし、古着やアクセサリ、タレントのプロマイドの店、あるいはクレープ店などファストフードの屋台が集まり、若者を集め、流行の発信地として定着すようになりました。

さらに原宿には、「原宿ビブレ 21」(昭和 59)、「COXY21」(昭和 60)、「原宿クエスト」(昭和 63)、「ユナイテッドアローズ」(平成元)のオープンなどファッションストリートが形成されました。



## 高木健夫と金王丸伝説

歴史上の人物にまつわる伝説は、どのようにして作られてゆくののでしょうか。新聞記者で評論家の高木健夫の著書『東京の顔』を読んでみると、そんなことを考えさせられます。

高木は明治 38 年（1905）に福井県で生まれました。国民新聞社、大阪毎日新聞社を経て昭和 5 年（1930）に読売新聞社に入ります。小学生の頃に貝塚を掘るなど、早くから歴史に興味をもっていた高木は、記者になってからは東京の歴史を訪ね歩いたり古地図を漁るのが「道楽」だったそうです。

二・二六事件のころ、社会部にいた高木は、東京市内版に「町の歴史」を読み物として連載したらどうかと社会部長に提案しました。それに対して部長はひと言、「つまらんな」と吐き捨てるように言ったそうです。その後、中国に渡り北京・南京特派員として活躍します。

終戦後、読売紙上の「編集手帳」欄を担当しますが、その一方で、戦後の東京のめまぐるしい変貌に「異常な採訪欲を刺激された」高木は、画家で随筆家でもある木村荘八（1893—1958）らと東京の風俗研究に取り組みました。その成果が『東京の顔』に結実します。

本書に収録されている「渋谷金王丸」は、『平治物語』に登場する謎の多い人物「金王丸」を扱ったものです。この作品では、渋谷の地名の由来等について述べたあと、突然、「お前、何処の若えもんかい？」「ブヤです。」「おう、ブヤのアンちゃんか」などと、不良少年仲間という

「ブヤのアンちゃん」が生ッ粋の渋谷生まれの渋谷ッ児を指すならば、その渋谷ッ児の第一号はここにいう金王丸でなければならぬ。」と唐突に金王丸の話が始まります。

次に金王丸の出生のエピソードが続きますが、その中で金王丸の両親が八幡宮に子授けを祈願する文言等をみると、その出典は金王八幡宮所蔵の「社記」であることがわかります。かつて「社記」の内容は一般には流布されておらず、昭和 27 年刊行の『渋谷区史』で初めて活字化されました。高木はこうした新しい情報も丹念に集めていたのでしょう。

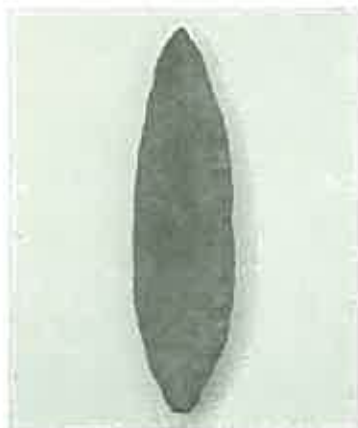
また、金王丸が源義朝に従って戦った平治の乱での様子、そして敗走後に尾張国で義朝が家臣にだまし討ちにあうところは、近松門左衛門の浄瑠璃「鎌田兵衛名所盃」を用いています。そして義朝最期の顛末を都に残る義朝の愛妾常盤御前に告げるところは、『平治物語』がベースとなっています。これらのストーリーの調整は高木の腕の見せどころというべきでしょうか。

古典文学や地域伝承を織りまぜて、新しい金王丸の伝説がまた一つ誕生したということになりそうです。



『東京の顔』昭和 34 年光書房  
(木村荘八画)

## 収蔵資料紹介



ゆうぜつせんとうき  
「有舌尖頭器」

長さ 5.3 cm  
幅 1.3 cm  
厚さ 0.7 cm

有舌尖頭器は、いまから約一万六千年前からはじまる縄文時代草創期の中頃から使用された石器です。尖頭器とは槍先に装着する石器のことで、木製の棒に取り付けて、手で投げたり突いたりして、大型動物の狩りに使っていました。この石器は、槍先に付ける部分が文字どおり「舌」状の茎（なかご）があるのが特徴で、有茎（けい）尖頭器とも呼ばれています。

有舌尖頭器は草創期に東日本を中心に全国から出土し、さまざまな形態がありますが、出土した遺跡からいくつかのタイプに分けられています。逆刺（かえり）があるものやないもの、舌部が先細りしているものや丸みを帯びているものなどです。北海道立川遺跡、新潟県小瀬が沢洞窟遺跡・中林遺跡、長野県柳又遺跡、神奈川県花見山遺跡などが有名です。

大型動物の狩りに使われて

いた有舌尖頭器ですが、やがて気候が温暖化してくると、動物もイノシシやシカなどの小動物に変わります。俊敏な動きに対応できる弓矢が発明され、尖頭器は姿を消しました。

さて、今回ご紹介している有舌尖頭器は、千駄ヶ谷五丁目遺跡の第二地点で見つかりました。この石器の特徴ですが、有舌尖頭器の舌部にある逆刺が未発達であり、比較的緩やかな逆三角形をしています。さらに使用している石材の関係で、打製石器に見られる、石器の剥離が鮮明に残っていません。

渋谷では草創期に特有な遺物は、この石器のみです。また土器や生活した跡なども発見されていませんが、千駄ヶ谷五丁目遺跡からほど近い新宿区の百人町三丁目西遺跡からは、草創期の隆起線文系土器が出土しています。今後、渋谷でも発見されるかもしれません。

### 【今後の展示予定】

- ◆特別展「与謝野晶子と文芸誌  
—「明星」から「冬柏」まで—

令和3年1月11日（月・祝）まで

- ◆企画展「紙と日本人」

令和3年1月19日（火）～3月21日（日）

- ◆企画展「第21回 渋谷現代短歌」(仮)

令和3年4月1日（木）～4月11日（日）

### 白根記念 渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

- 開館時間 ◆11:00～17:00（入館は閉館の30分前まで）  
金曜日は19:00まで、土曜日は9:00から
- 休館日 ◆月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始
- 入館料 ◆一般:100円（80円） 小中学生:50円（40円）  
※1日以内は10名以上の団体料金  
※60歳以上の方、障害のある方と付き添いの方は無料
- お問合わせ ◆東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.45  
令和2年12月15日発行